

東熊野苗畑遺跡発掘調査説明会資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010年11月21日(日)

調査要項

遺跡名	東熊野苗畑遺跡(ひがしくまのなえばたけいせき)	
遺跡番号	628	
所在地	山形県村山市大字本飯田字熊の山	
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所	
調査原因	東北中央自動車道(東根～尾花沢)の建設整備	
現地調査	平成22年5月18日～11月30日	
調査面積	2,250平方メートル	
遺跡種別	集落跡	
時代	縄文時代, 平安時代	
遺構	竪穴住居跡・溝跡・柱穴・河川跡等	
遺物	縄文土器・石器・土師器・須恵器	
調査担当者	調査課長	阿部明彦
	課長補佐	伊藤邦弘
	専門調査研究員	氏家信行 佐竹弘嗣
	調査研究員	齋藤健(調査主任) 川崎康永 大場正善
	調査員	濱松優介
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課	
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所	

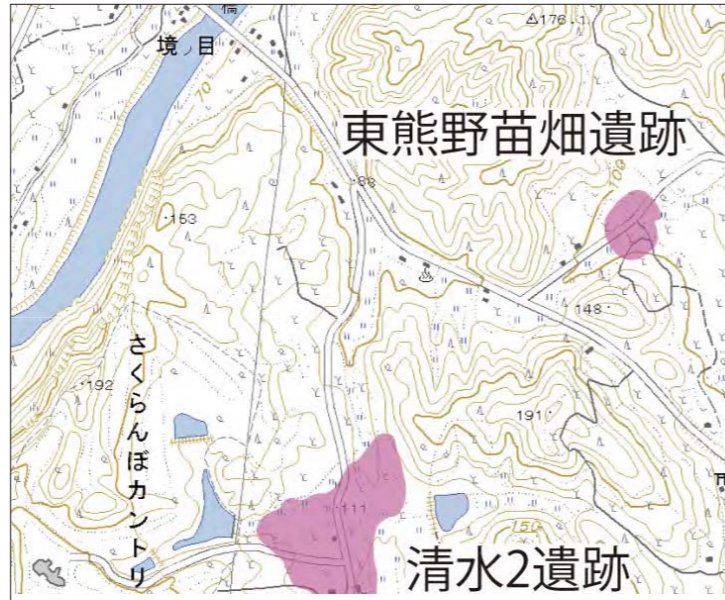


図1 遺跡位置図(1/25,000)



写真1 調査前の様子(北西から)

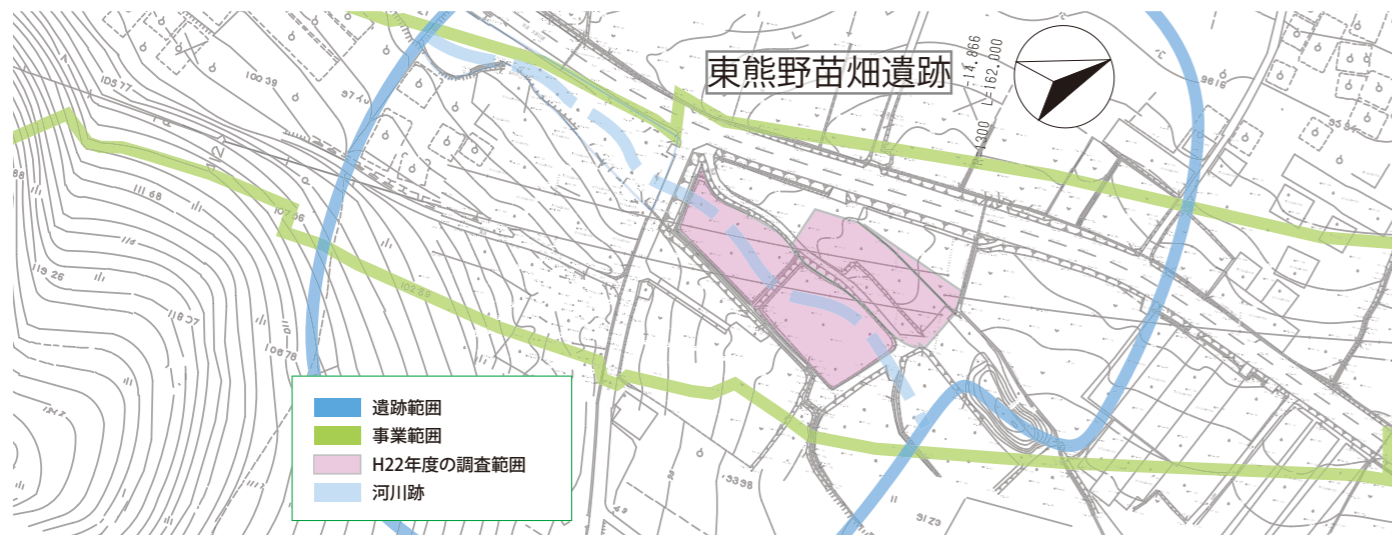


図2 調査区概要図(縮尺任意)

1 調査の概要

東熊野苗畑遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地の境界、最上川三難所から約3km離れた本飯田字熊の山に位置します。地形的には、昭和橋付近から南東に延びる谷筋の、さらにゆざ温泉の南約200mから東に分岐する浅い谷間(袖崎低地)に立地しています(図1)。遺跡では、縄文時代と平安時代の遺構・遺物、そして埋没した最上川の支流が発見されました。なお、清水遺跡(2)は、南西に約1.5km離れています。

当センターでは、東北中央自動車道に係る発掘調査の一環として、本遺跡の約2,250㎡の範囲を対象とした発掘調査を行いました(図2)。調査区は、北側の一段高い西区と、地形に沿って低くなっている東区に便宜的に分けております(図3)。見つかった遺構は、西区でその北側に集中して竪穴住居址、掘立柱建物跡、溝などが、東区では調査区の南西―北東に走る河川跡などです。なお、調査区では、西区の東側に戦前～戦後と思われる水田跡と、東区全体に昭和50～60年に行われた圃場整備の跡が認められます。

2 見つかった遺構と遺物

(1) 西区

西区の北側では、竪穴住居址(ST10)と掘立柱建物跡(SB25・SB67)、幅約30cmの浅い溝跡(SD4・SD5)が見つかりました。ST10は、東側の一部が水田造成で壊されていましたが、約4m四方の大きさであったと思われます(写真8)。住居址の堆積土からは、9世紀ごろと思われる土師器の甕や須恵器片が出土しました(写真9)。

SB67は、ST10に重複しています。SB25は、ST10よりも約2m南に離れており、2間×2間の正方形の形をしていました(写真7)。

SD5は、ST10とSB67を囲むように設けられ、その西側の途中で分岐するようにSD4がつながります。とくに、SD4の底部からは、西暦915年に噴火した十和田湖の灰白色火山灰とみられる火山灰が認められました。

(2) 東区

東区では、現地形の低地部で、南西―北東に走る河川跡が見つかりました(写真2)。高低差から、

南側が上流で、北側が下流になります。深さは、水田造成で上部が削平されていますが、0.6～2m程度で、北に行くほど深くなっています。河川跡の輪郭を平面上で検出した時点では、蛇行した4本程度の流路が、また部分的に掘り下げたトレンチの土層観察からは、4本以上の流路が認められました(図3、写真2)。河川跡の土層からは、水が流れていた時期や湧水していた時期を繰り返し、また幾度となく流路を変えていたことが判りました(図4)。さらに、埋没後も地下水が流れていたことも判りました。

一番新しい河川跡(SG54)には、河川が湿地になって黒色粘土層が堆積する時期に、灰白色火山灰が降り積もっていました(図3のトーン部分)。火山灰堆積後にも、幅1m程度の浅い流路は認められますが、火山灰が降灰して少し時間を経たのちに、河川としての機能を失ったと考えられます。

SG54よりも古い河川跡では、その底部から、縄文土器や石器が出土しました(写真3・4)。これらの遺物には、表面に磨滅した痕跡が認められます。

また、調査区内に縄文時代の遺構は見られないことから、これらの遺物は、おそらく上流部にある縄文時代の遺構から流されてきたものと思われます。これらの遺物がいつ流されてきたのかは、まだはっきりしませんが、少なくとも、灰白色火山灰が堆積する以前に流されてきたものと考えられます。

また河川跡からは、樹木や種子、昆虫の羽根などの自然遺物も多量に出土しました(写真5)。今後、土壌に残る花粉化石の分析と合わせて、当時の本遺跡周辺がどのような気候であったか、そしてどのような植物が生い茂っていたのかを明らかにする予定です。

3 まとめ

東熊野苗畑遺跡では、最上川の支流とともに、その周辺に営まれていた古代のヒトびとの生活の痕跡が認められました。また、流されてきた縄文時代の遺物も認められました。河川跡に残された古環境にかんする試料の解析が進めば、村山盆地北部の当時の気候を加味した、過去の生活像の復原が可能になると考えています。

東熊野苗畑遺跡で発見された遺構と遺物



写真2 河川跡の検出状況（南から）



写真3 河川跡（Bトレンチ）で出土した縄文土器片



写真4 河川跡（Cトレンチ）で出土した縄文土器片



写真5 拡張区で出土した須恵器片（甕）

図3 調査区全体の平面図



図4 Eトレンチ内の河川跡堆積状況

*図中のトーンは、水が流れていたことを示す砂層。
幾度となく流路が流れを変えていたことを表している。



写真6 河川跡内の樹木片の出土状況

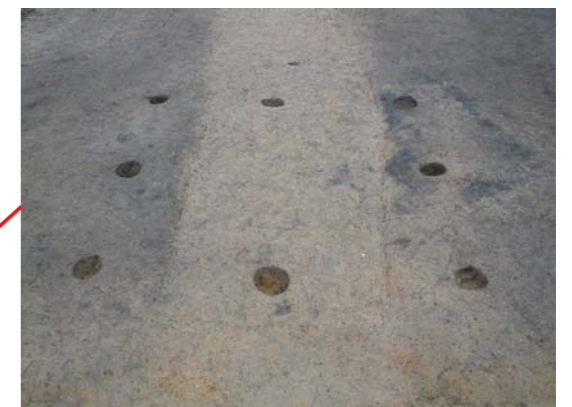


写真7 掘立柱建物跡（SB25）完掘状況



写真8 竪穴住居跡（ST10）の検出状況



写真9 ST10からまとめて出土した土師器片